いのちと地域を守る

寒さ対策 毛布保管を
タワー建設 要望大切

避難場所に不安も

むすび塾開催に合わせて住民30人を対象に実施したアンケートに基づく議論もあった。住民の8割が避難先への不安を訴え、特に冬場の寒さ対策を案じる声が目立った。

東日本大震災では、津波の難を逃れた後、低体温症が多発し、亡くなった人もいた。さつき町内会長の亀卦川正一さん(79)は「3月なら釧路の最低気温はマイナス20度前後、昼でもプラスになるかどうか。屋外では凍死してしまう」などと話した。

木村理事長は、避難先にあらかじめ、毛布や防寒具を保管することを勧めたほか、「車は暖房が使えて情報も入手できる」と話し、車の有効活用を呼び掛けた。

大楽毛地区に似た土地の条件で被災した語り部3人も参加し、震災の教訓を伝えた。

宮城県七ケ浜町の指定避難所で津波にのまれ、一緒に避難した祖母を亡くした渡辺さんは「避難所にも津波は来ることがある。できるだけ高い所に逃げて」と訴えた。

椎井さんは、社員300人と高台へ徒歩避難した経緯を説明し、正確な情報に基づく素早い判断の重要性を強調。野田さんは、女川消防署の屋上で津波に流された体験から「事前に複数の策を考え、最悪の事態を回避してほしい」と話した。

住民たちが日頃の備えについて助言を求めると、語り部たちは「車のガソリンは満タンにする」「避難の時に足を傷つけないように、寝室に靴を置く」「トイレ用に普段から湯船にお湯を入れておく」などと答えた。

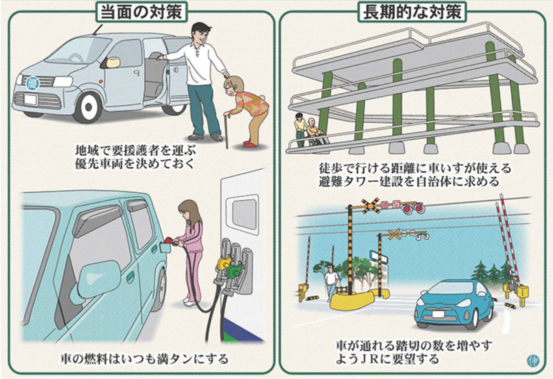
大津波を想定し、大楽毛地区連合町内会は積極的に、対策に取り組んできた。避難先の王子マテリア釧路工場の建物は、同社と協定を結んで確保。市に対しては、避難タワーの建設を要望している。

「短期と長期の課題を分けて考え、要援護者を運ぶ優先車両はすぐに地域で相談し、避難タワーは継続して行政に整備を働き掛けるべきだ」と木村理事長。備えの心構えとして①危機感を持ち続ける②避難対策を諦めずに知恵を出す③いろんな対策にチャレンジする―の3点を挙げ、住民にエールを送った。

連合町内会長の中村さんは「津波の体験者の話を聞いて、住民の防災意識が高まったと思う。今後も地域の防災の充実に努力したい」と述べた。

参加者と語り部が、震災の教訓や備えについて意見交換した

津波避難対策などの勧め


当面の対策
地域で要援護者を運ぶ優先車両を決めておく
車の燃料はいつも満タンにする
長期的な対策
徒歩で行ける距離に車いすが使える避難タワー建設を自治体に求める
車が通れる踏切の数を増やすようJRに要望する
伸

■むすび塾に参加して ―― 北海道・釧路市大楽毛地区

隣の人を置いて自分だけ逃げられるかは疑問だ。**自助と共助の兼ね合いをどうするのか、考えなければならない。**東日本大震災では低体温症で亡くなった人が多かった。釧路の3月の最低気温は氷点下20度前後で、逃げられても凍死する。津波で犠牲を出すことのない避難場所を確保したい。

＝さつき町内会長・亀卦川正一さん(79)

避難に使う車が渋滞で動けなくなることを想定した訓練で、課題が見えてきた。**地震で信号が作動しなかった場合、車の多い幹線道路をどのように横断するのか。**道路を渡らないと指定避難先にはたどり着けない。徒歩と車の避難をどう組み合わせればいいのか、連合町内会で議論したい。＝大楽毛地区連合町内会長・中村啓さん(76)

震災後、大楽毛地区の津波想定が変わり、避難先としていた場所が使えなくなった。将来的には避難先の選択肢を増やすことが必要となる。**訓練を重ねるのに伴い、訓練慣れする住民もいる。常時、緊張感をつくり出すことには苦労している。**それでも参加してもらえれば逃げる癖が付く。

＝光栄町内会長・土岐政人さん(63)

「より遠く高い所へ」基本に

減災・復興支援機構理事長
木村拓郎さん

津波避難対策は地元ですぐにできる当面の話と、時間のかかる将来構想を分けて考えてほしい。

当面の策としては「より遠く高い所へ」を基本に、車による避難がうまくできるよう地域で具体的に話し合っておくことが大事だ。

要援護者を乗せる優先車両を普段から決めておき、誰の目から見ても分かるようにステッカーを用意してはどうだろう。緊急時には、大型車で道路を遮断し、内陸への避難路を確保することも考えられる。

避難タワーの建設は、地元だけではできないので、行政に要望を続ける必要がある。大きな揺れで液状化現象が起きれば車で逃げることは難しく、歩いて行けるタワーの整備を真剣に考えるべきだ。

内陸へ避難するために国道や線路を横断するルートが限られている。内陸側にある王子マテリア釧路工場に対して、敷地内に避難ビルやタワーが造れないか協力を呼び掛けたり、車が線路を渡れる踏切を増やすようJRに求めたりすることも検討してほしい。

これで100パーセント大丈夫だと言える防災・減災対策はない。確率を上げるため、事前にどれだけ努力できるかが大切だ。大楽毛は防災意識の高い地区。これからも危機感を持ち、諦めず、さまざまな対策に挑戦してほしい。

語り部から

過信は禁物まず避難

渡辺英莉さん(22)＝東北学院大4年＝

波が引くと、そこにいたはずの祖母の姿がありませんでした。

宮城県七ケ浜町菖蒲田浜の自宅そばの海抜10・8㍍の高台で、祖父母と3人で津波にのまれました。高台は1960年のチリ地震では、津波が到達せず、住民から安全だと信じられ、私自身もそう思っていました。

祖母とは直前まで仙台で食事を楽しんでいたのです。「英莉と一緒にいれて幸せだ」。笑顔でこう話してくれていました。高台からさらに逃げようとした際につないだ手は、波にのまれた衝撃で放してしまいました。私は水から顔を出した後、近くの木にしがみつきました。祖母は数日後、遺体で見つかりました。

住み慣れた地域で家族と普通にご飯を食べられることの大切さに、震災を通して気付きました。

私のような経験は誰にもしてほしくない。地震はいつ起きるか分からない。津波が起きたら、言い伝えや自分の考えを過信せず、できるだけ高い所へ避難してください。

正しい情報収集重要

椎井一意さん(64)＝東北電機製造社長＝

会社は海岸線から約800㍍の場所にありましたが、東日本大震災が起きるまで地震や洪水には備えていても、津波への対策はほとんど考えていませんでした。

それでも全社員約300人が助かったのは、早い段階で「40分後、10㍍の津波が到達」との情報を携帯ラジオで得られたためだと思います。「40分あるなら逃げられる」と判断し、徒歩での内陸避難を指示しました。

社員が行列をつくって横断した幹線道路は、車の渋滞が起きていました。社内マニュアルに、津波を想定した対策が無かったにもかかわらず、社員が指示に従ってくれたことは幸いでした。津波が予想時刻より早く到達していれば、犠牲が出たかもしれません。

運もありますが、災害時の企業対応には正しい情報の収集とトップの素早い判断が大事だと、震災で再認識しました。工場が被災しても、社員の命さえ守れれば、早期の業務再開・復興につなげることができるのです。

堅固な建物も探そう

野田和好さん(45)＝石巻地区消防本部＝

震災当時は女川消防署（宮城県女川町）に勤務していました。海から50㍍ほどにある2階建ての庁舎でした。

地震が起きて間もなく、濁流が庁舎に流れ込みました。同僚と急いで階段を駆け上がり、地上から約16㍍にあるアンテナ塔にしがみつきました。

水位の上昇は止まらず、水面に投げ出されました。津波は自転車ほどの速さだったと記憶しています。民家の屋根にはい上がるなどして、2㌔ほど流された所で建物の屋上に避難できました。

屋上に逃げていた住民の指摘で、右太ももの出血に気付きました。冷たい海水で痛みは感じなかったのですが、40針以上を縫う大けがでした。助けを求めて交代で笛を吹き続けると、同僚が駆け付けてくれました。

高台への避難が一番ですが、それができずに建物に避難する可能性があるなら、堅固な建物なのか、防寒は大丈夫かなど、事前に考え、最悪の事態を回避すべきです。